

小樽経済史

— 明治時代 —

倉田 稔

もくじ

はじめ

1 明治維新まで

2 明治時代

1 明治前半

2 明治後半

小 括

はじめ

本書は、小樽¹⁾経済史である。もちろん、経済は他の側面と絡み合うので、社会、政治、文化にも触れることになる。

1 明治維新まで

太古、小樽は海底にあった。昔はアイヌ人だけの土地だった。

1600年ころ、福山の人、八木勘右衛門が漁業（鯨漁）にきた。1660年ころ、西川伝右衛門が高島・祝津を開いた^{1a)}。夏に福山＝松前から船で和人がやってきて、アイヌと交易し、帰っていった。

1) 小樽の人は Otaru の ta にアクセントをつける。

1a) 須藤正敏『ヲシヨロ場所をめぐる人々』静山社。

小樽のアイヌ人はシャクシャインの乱(1669年)²⁾に呼应した。18世紀初めに、氏家が場所(=藩による交易所)の持主だった時、オタルナイのアイヌ人が乱をおこした。

小樽は北前船の寄港地でもあった。ロシアの軍艦が来て小樽を調査した。

18世紀初め、近江商人が場所(=漁場)を持ち、アイヌ人に漁をさせた。1710年ころ、岡田弥三右衛門がオタルナイを開いた。場所請負人は、岡田弥三右衛門、高島は西川伝右衛門であった。小樽は氏家、高島は蠣崎が運上金で生活した。

18世紀なかごろ、鯨小屋が2、3百戸建った。2000人の人が浜を糧とした。二八倉が建った。二割を運上屋が取ったから、そう言うのである。

1807(文化4)年、近藤重蔵が小樽地方を調査した。1808年、井上貫流が高島をまもった。手宮へ道路が開いた。19世紀初め、高島にアイヌ人が380人住んでいた。明治の初めにも市内にアイヌ人は30人ほど住んでいた。

明治維新が1868年に行なわれるが、それまで北海道は、松前藩が江戸幕府の命を受けて北海道を支配していた。そこは、蝦夷、つまりアイヌの国であった。小樽は、オタルナイ(砂と川)というアイヌ語に由来する。現市内の稲穂(イナウ)、色内(イルオナイ)、手宮(テンムンヤ)、高島(タカシユマ)などの地名も、アイヌ語から来た。

幕府は1865(慶応元)年に、オタルナイ場所を村並にした。市街地ができはじめ、「穂足内村」になった。山田兵衛が名主に選ばれた。同年、小樽大火があった。小樽の港は南東を向いている。幕府の役所がオタルナイ役所としておかれた。明治元年にはその焼打ち事件が起きている³⁾。オタルナイ騒動である。

19世紀末に、ヨーロッパ列強は帝国主義政策をとり、世界を植民地化していた。イギリスとフランスは、日本に影響力を持つようとして画策していた。フランスはナポレオン3世の時代であり、イギリスはヴィクトリア女王とその自由

2) 奥山亮『補稿 アイヌ衰亡史』みやま書房 1979年。

3) 長谷川伸三「明治維新と小樽内騒動」(『北海道の研究』第4巻 清文堂 昭和57年)。

貿易的帝国主義の時代であった。イギリスは中国支配が急務であって、日本を帝国主義支配する余裕がまだなかった。アメリカは、日本を開国させた国だが、イギリスほどまだ支配意欲がなかった。ヨーロッパ資本主義諸国は、中国、日本、朝鮮を、資本主義の市場にしようとしていた。この旧帝国主義的進出によって、ヨーロッパにはブルジョアジーが成長した。

1796年に、プロトン指揮の英船が虻田（北海道）に来た。1837年に、アメリカ船モリソン号が日本人漂流民を乗せ、通商をもとめて浦賀に入港した。だが、幕府はこれを追い返した。1840年には、オランダ国王が開国を薦めたし、フランスの軍艦が琉球にきた。1845年にはイギリスの軍艦が長崎に、1846年にアメリカの軍艦が浦賀にきた。これ以来、英、仏、米、露の軍艦が、頻繁にやってきた。

琉球に寄ったペリーが、1853年に浦賀に来て、翌1854年に日米和親条約を結んだ。その内容の一つは、下田と函（箱）館の開港であった。その後、英・仏・蘭・露の諸国も同様の条約を結んだ。1858年には日本は、アメリカと日米修好通商条約を、そしてその後、英・仏・蘭・露とも同様の不平等条約を結んだ⁴⁾。ヨーロッパでは、ドイツがフランスに勝ち、ドイツ帝国が成立し、1871年に歴史初めてのドイツ統一国家ができた。オーストリア＝ハンガリー帝国とともに、これら中進国は、帝国主義的進出はまだできなかった。

徳川幕府は国内を治めることのみを考え、世界の中で日本をどのようにするかを考えていなかった。そこでアメリカの黒船の来航によって、幕府は虚をつかれたのだった。その後、徳川幕府はもろくも壊れる。一方、天皇、公家側は、徳川幕府以上に政治や世界を知らなかった。老中阿部正広が国事を天皇に聞いたことが、天皇制の登場に道を開いた。

弘化4（1847）年に、南部藩（岩手県）で百姓一揆が起きた。安家村の俊作（1810-1873）はその時の指導者の1人である。彼は、同志とともに流罪になった。ついで嘉永6（1853）年、近世百姓一揆史上最大の闘いとされる南部二閉

4) 『日本歴史』中、新日本出版社。

伊（にへい）一揆で、俊作は釈放された。彼の方針でこれらの一揆が闘われたのであった。その後、俊作は北海道に渡り、役人として函館戦争に従軍し、戦後、開拓に従事した。そして姓を菊池とし、小樽に住み、死んだ。龍徳寺（真栄1丁目）に葬られた⁵⁾。

2 明治時代

1 明治前半

明治維新は、主に南西日本の下級武士団の反乱であった。これはブルジョア民主主義革命を考えていなかった。日本には政治的市民は育っていなかった。そして天皇制が復活した。

1868年の明治維新の年に、榎本武揚⁶⁾ら旧幕脱走軍が、蝦夷島（＝北海道）を占拠した。榎本隊は、函館で、ほんの短い間、日本最初の共和国を作った。入札（つまり投票）で指導者を選んだのである。榎本はオランダ留学で選挙を知っていた。1869年、明治維新の翌年5月に、榎本軍は降伏した。こうして北海道では明治維新は遅れた。

明治元（1868）年の箱館戦争で、旧幕府敗走軍の彰義隊士らが小樽に来て、本陣を龍徳寺に、また正法寺にも分屯した。彼らは翌明治2（1869）年に降伏した。新撰組の永倉新八は、明治10（1877）年ころ小樽に来て、名を変え、明治15（1882）年から小樽を離れ、32（1899）年に小樽に戻り、大正4（1915）年に死んだ。

明治維新で、蝦夷地改め北海道となった。北海道は政府直轄の開拓地とされた。オタルナイは小樽になった。1869年9月に江戸改め東京となり、東京が首都になり、版籍奉還がなされた。大名は華族になった。

この日本の統一国家は、ヨーロッパの真似をしようとした。すぐさま朝鮮侵

5) 茶谷十六『安家村俊作』民衆社 1980年。

6) 加茂儀一『榎本武揚』中央公論社。

略をくわだてようとした。一方、旧大名＝旧藩主は県知事になった。だがその後の廃藩置県により辞めさせられた。岩倉見視、大久保利通らは、欧米を視察後⁷⁾、ブルジョア革命を経験したイギリスやフランスではなく、ドイツを模範とした。

北海道は、初め本州の植民地であって、その後、半ば植民地となった。同時に、北海道の拓殖の歴史はアイヌ人への侵略の歴史でもあった。ただし小樽は、北海道の中では相対的にアイヌ人が少なかった。

北海道では、江戸時代の松前藩に代わって、新政府により開拓使が、明治2(1869)年から15(1882)年までおかれた。樺太開拓使がおかれた明治3(1870)年から明治4(1871)年までは、それは北海道開拓使と言われた。開拓使設置以前は、北海道行政を箱館府が行なった。これは省と同格だった。だがその内実が伴うのは、明治4(1871)年からである。初代長官は鍋島直正だったが、実務を始める前に辞任した。東久世通禧が長官として明治2(1869)年に北海道に向かった。同年、島義勇判官が銭函の開拓仮役所に着任した。島は、道に4つあるうちの1つ、手宮海官所を設置した。彼は場所請負制度を廃止した。海官所の仕事は、移出入税、停泊税、船税を徴収することなどだった。これは、明治3(1870)年に海関所、明治8(1875)年に船改所、と改称された。海関所は、明治4(1871)年に小樽の信香(のぶか)に常夜灯をたてた。それは高さ8mの燈台⁸⁾であった。1870年に小樽は町並になった。

箱(函)館は南にあるので、島判官が札幌にゆき、市街地と庁舎の建設を始めたが、予算がかかりすぎて長官と対立し、罷免された。代わって岩村判官のもとで札幌が建設された。こうして明治4(1871)年に、政府は札幌に開拓使庁をおいた。つまり函館から移ったのである。小樽の市街地は、勝納(かつない)川あたりに自然と形成された。開拓使が、明治4(1871)年、小樽の港町・堺町のあたりで道路整備を小樽商人に命じた。

7) 英語訳 “Iwakura Embassy” あり。

8) これは今、メルヘン交差点に再現されている。

1872（明治5）年、政府は、北海道に官営工場を多数建設した。小樽では小樽郵便局が開設された。1872年、小樽の港に石の埠頭ができた。同年、小樽のアイヌ男女学生を一五人東京で勉強させた。

黒田清隆は、薩摩出身であり、彼は明治3年に開拓使次官・樺太専任になった。だがロシアとの国力の差を痛感し、以後急速に樺太放棄、北海道開拓優先策に傾いた。彼は明治4（1871）年に渡米し、開拓指導者を求め、ホーレス・ケプロンらを招いた。明治5（1872）年、ケプロンの提言をいれて開拓使10年計画を定めた。1874（明治7）年に、黒田清隆は開拓使長官になった。彼は屯田兵制度を創設した。樺太問題解決のため、榎本武揚をロシアに派遣し、明治8（1875）年に、樺太・千島交換条約の締結をした。榎本武揚は幕臣だったが、新政府に乗り換えて、北海道開拓使や駐露特命全権大使など政府高官の階段をあがっていった。1875（明治8）年、樺太・千島交換条約で、榎本はロシアに対して、アイヌ人の住んでいる所はすべて日本帝国の領土だとした。明治政府の対アイヌ人政策は、刑罰を伴って、アイヌの権利を奪った。

榎本武揚は、小樽にも農園や貸し地を沢山もった。彼は小樽で宅地造成をした。開拓使が廃止され、新官吏たちは官有物の払い下げを受け、それをもとに商売を始め、威張った。

明治7（1874）年、小樽・札幌間の電信線が完成した。手宮、小樽、銭函に、教育所が設置された。

大久保利通は、明治7（1874）年に台湾侵略を強行した。そして償金を奪って引き揚げた。政府はまた明治8（1875）年に江華島事件をおこした。その見返りとして朝鮮政府は日本と不平等条約を結ばされた。

国内では、華族、上級士族が、地主、資本家になっていった。維新政府に資金を貸した豪商が政府と結び付き、財閥になっていった。北海道の土地は、皇室、華族、特権商人に払い下げられた。開拓使も後期になって官営企業を払い下げる政策をとり始めた。藩閥・政商がめぼしい物件を狙って暗躍していた。

自由党ははじめ、民主主義的ではなかったが、農民と結び付いて徐々に自由主義的になった。中江兆民が塾を開いた。大隅重信は、国会開設をする必要が

あると思い、自分の新聞でこう書かせた。政府が総額1400万円あまりを投資した北海道開拓使の官営事業を、わずか39万円（無利息、30年払い）で、薩摩出身の政商らに払い下げようとしている、と。自由党の運動を壊そうとして、政府は一時、官有物払い下げをとりやめ、国会開設を発表した。

1878（明治11年）、ジョン・ミルンは手宮の洞窟を調べた。1880年、開拓使の役人が、その資料を収集した。

1879（明治12）年に、幌内炭山が開坑した。ここで良質の石炭が出ることが判ったからである。1880年、はじめて汽車が走った。手宮棧橋ができた。1880（明治13）年、函館・小樽間定期航路ができた。1883年に小樽の日和山（ひよりやま）灯台が開設された。手宮（小樽）・札幌間に鉄道が開通した。

1880（明治13）年、開拓使布達条例により官製の小樽相場会が開設された。小樽船改所の下で、平均相場価格を提示した。これは明治18（1885）年に廃止されたが、その後、小樽商人が自主組織をつくり始めた。明治16（1883）年に興商会ができ、それが明治21（1888）年に協同談話会となり、明治22（1889）年に農工商会、明治23（1890）年に小樽共商会となった。明治17（1884）年の同業組合準則が交付された。それによる同業組合は、道内48、函館15、小樽9、であった。

陸商・高橋直治は、海産商・板谷宮吉、金子元三郎らと、明治27（1894）年に、小樽米穀・肥料取引所を営業した。明治28年に小樽米穀外五品目取引所と改称した。

1881（明治14）年、前述の開拓使官有物払い下げ事件が起きた。これらがきっかけで、1882（明治15）年に開拓使が廃止された。時の長官は黒田だった。幌内鉄道が全通し、それにより石炭を運べることになった。

1886（明治19）年、北海道庁が設置された。道庁長官には岩村通俊がなり、その後、北垣国道がなった。北海道土地払い下げ規則が公布された。北海道では、天皇家、皇族、華族、旧大名が、よい土地を奪ったが、その後、資産家が土地を入手した。そのため、アイヌ人は辺境へ追いやられた。そして、これらの土地を開拓し、あるいは耕作するために、農民が必要になり、本州から農民

を呼び込むことになる。

1889年、大日本帝国憲法が公布された。これは近代的憲法の名に値いしなかった。幌内炭山と鉄道は、北海道炭鉱鉄道会社へ払い下げられた。1889年、小樽港は特別輸出港となった。1891年、小樽で「北門新報」が創刊された。1891年丸井今井呉服店が支店を出した。

明治期における小樽の経済的発展は、いくつかの転機によって特徴づけられる。

1つは、1880（明治13）年の手宮・札幌間鉄道の開通。

2つは、1880（明治13）年の三井銀行小樽出張店の設置。

3つは、1885（明治18）年の日本郵船小樽支店の開設。

4つは、1889（明治22）年の官営鉄道の北海道炭鉱鉄道への払い下げ、である。

これらには、国の経済政策と中央資本の進出とがからみあっている。

一方、小樽では地場産業が伸張した。まず鯨業の漁場資本家が登場した。ついで、明治中期には海陸物産商が台頭した。こうして小樽では、国家経済政策と中央資本の進出、および地場産業の伸張の2つの軸で、経済が発展する。

小樽の経済発展の一つの転機となったのは、鉄道であり、手宮・札幌間鉄道の開通である。鉄道が、1872（明治5）年に、新橋・横浜、明治11（1878）年に、神戸・京都、そして明治13（1880）年に、日本で3番目に早く、手宮（小樽）・札幌間に敷かれた。この鉄道の目的は、明治6（1873）年発見の幌内炭田の石炭運送であった。

鉄道はジョセフ・ユーリー・クロフォードが設計・指揮した。クロフォードは、1842年、米国ペンシルヴェニア州に生まれた。ペンシルヴェニア大学とフィラデルフィアの工学院で土木の専門教育をうけた。卒業後、コールヒ炭鉱やミドルボールド炭鉱に炭鉱技師として、また連邦陸軍の土木技師にもなった。南北戦争では北軍大尉として土塁を築いた。終戦後、ペンシルヴェニア鉄道などの鉄道測量技師、建築監督となった。1869（明治2）年、クロフォードはアメリカ大陸鉄道の完成をした。1878（明治11）年12月、クロフォードは来日し、「到

着の日から三年間、北海道の炭山を連絡する鉄道、ならびに車道建設兼土木顧問」となる。クロフォードは、1879（明治12）年2月に札幌に来た。3月から調査を開始し、幌内から札幌をへて小樽に鉄道を敷くのが最も良いと結論づけた。難所は熊碓・銭函間（現・小樽）の絶壁であった。6月、開拓使はクロフォードを技師長に任命し、彼は半年で札幌馬車道を開通させた。ついでアメリカへ戻り、鉄道資材や機関車を購入した。1880（明治13）年11月28日、手宮・札幌間の鉄道が開通した。弁慶号が時速20キロで走った。北海道で初めての鉄道であった。その後、札幌・幌内間鉄道も開通し、1881（明治14）年11月、幌内炭鉱から小樽へ石炭が運ばれた。この年、クロフォードはアメリカへ帰国した。彼は本国でも鉄道開発に腕を振るった。彼は大正13（1924）年に亡くなった。

いまも残る機関車「大勝号」は、手宮で作られたもので、「勝」は、戦争に勝つという意味である。鉄道敷設の難所は、張碓とそのトンネルだった。若竹トンネルは、第1、2、3があり、第3号が山の中を通った。その工事は1880（明治13）年1月8日に始まり、11月28日の運転開始式に間に合った。手宮－札幌間鉄道が開通した。

手宮線は、その後、北海道炭碓鉄道会社になった。明治32（1899）年10月に創業総会を開き、高橋直治、金子元三郎らが株主になった。函館から小樽までだった。手宮線とは関係なかった。明治37（1904）年10月に全線開通した北海道鉄道会社線になった。炭碓鉄道は、明治39（1906）年10月、北海道鉄道は明治42年（1909）年5月に、国有になった。

鉄道は、明治24（1891）年、上野・青森間が、明治37（1904）年9月、函館・小樽間が完成されていた。その後、小樽、この町は、明治に入ってから〈官製都市〉として誕生し発展した点では、北海道随一といえる…。その発展の礎は、早くも1880（明治13）年に建設された幌内－札幌－手宮（小樽）を結ぶ鉄道にあった。地下資源の乏しい新政府にとって、幌内炭鉱から産出される良質の石炭は、まさに虎の子財産ともいうべきもので、その積み出し港として小樽が選ばれた…。この鉄道は、東京－横浜間、京都－大阪－神戸間につぐ全国で三番目のものであり、北辺の難工事に莫大な国費と囚人を含む労働力を投入した政

府の意気ごみのほどがうかがえる⁹⁾。

鉄道の開通までは、輸送は船だった。それが、東京・函館・小樽をつないでいた。開拓使附属汽船を1873（明治6）年ころから冬以外に月1回でいど通わせ、また樺太、千島方面と連絡していた。樺太、函館、東京、根室への定期航路は、1873（明治6）年に開かれた。1875（明治8）年の、小樽への入港船は、555隻だったが、1880（明治13）年には5358隻となり、大正13（1924）年の入港船は全国第5位となった。

函館は北海道の玄関港だった。三菱会社は、1880（明治13）年9月から、函館・小樽定期航路を始めた。小樽から札幌へは、石狩川を利用して運んでいた。通信省は明治20年11月、定期航路を命じ、年額88万円を日本郵船に下付した。日本郵船は日本最大の海運会社で、三菱系であった。明治21（1888）年に小樽・増毛間に月5回運行するため、年額1500円を郵船に出した。明治18（1885）年以降、日本郵船は、多い年は10数隻で年間130-187回も運行し、明治32（1899）年9隻で130回、月13-17回であった。この年で定期航路保護期限が満了した。東廻り神戸・小樽線があった。明治25（1892）年、神戸・横浜・函館航路と、神戸・下関・新潟航路が、小樽まで延長された。明治38（1905）年、日本郵船は北海道統括支店を小樽に設置することに決めた。

移出入額	明治8年 (1875年)	明治10年 (1877年)	明治12年 (1879年)	明治14年 (1881年)
函館	1676	1675	4843	11336
福山（松前）	927	667	1177	1131
江差	1115	767	1574	1960
寿都	716	300	804	884
小樽		1650	2153	?

9) 夏堀正元「彼を育てた町——小樽」(小林多喜二全集月報3, 第3巻付, 1982年9月) 1ページ。

小樽の明治20（1887）年の移出入額は、149万円、全道の12.2%であったが、明治30（1897）年には3864万円で、全道の48.8%となり、北海道随一の港になった¹⁰⁾。

小樽の市心の大地主は初め、榎本武揚、北垣国道（第4代道庁長官）であった。鉄道は当初の計画が変更された。つまり市のはずれを通るようになったのであり、それは大地主の土地のそばであった。それを田中正造が国会で暴露した。

北垣国道は、四代目の道庁長官で、小樽の築港の建設や、小樽・函館間の鉄道敷設に尽力した。嵐山に銅像が建ったことがある。

明治政府は、条約改正案に反対した民権派を皇居三里外に3年間追放した。明治20（1887）年12月のその保安条例で、武内綱、大江卓、岡野知莊、林有造らが、東京から追放された。自由党員が避難してきて、小樽海岸の埋め立てによる土地造成を始めた。3万8千坪を分譲した。

現・長橋なえぼ公園は、明治26（1893）年、小樽苗圃（びょうぼ）として開設された。その後、小樽近郊の国有林に、植林事業のために、苗木を供給するとともに、その敷地内に、見本として植林した。本州の代表的な樹種をはじめ、外国樹種見本林も加えられ、道内では特殊な地位をしめた。

2 明治後半

1893年に日本銀行派出所が開設された。1895年に農商務大臣榎本武揚より、小樽商業会議所設立の許可を得て、1896年に小樽商業会議所が設置された。北海道は経済的には内地並になっていないとして、所得税が免除されていた。そのため、なかなかできなかった。小樽商業会議所の議員が選挙された。初代会頭は山田吉兵衛だった。彼は、松前藩の城下町福山に生まれ、松村家の出である。小樽にきて、小樽の名家山田兵蔵の養子になった。若くして家督を相続した。市街から手宮への海岸道路を自費で建設した。

10) 統計は、『小樽市史』を見よ。

1894年に小樽で電灯がついた。

明治政府の富国強兵政策により、日清戦争（1894年）が起こされ、日本では産業革命がこのころ成立した。この戦争をきっかけにして、日本は台湾を占領し、帝国主義的になり始めていた。そして治安警察法が1900年にすでに公布されていた。

日清戦争は、朝鮮支配をめぐる、清国（＝中国）と日本の戦争である。前年1894年6月の東学党の乱を鎮圧するために、韓国政府が清政府に出兵を依頼した。それで日本も出兵した。この戦争は結局、日本が清から賠償金を獲得したことで終わった。日清戦争は、小樽に刺激を与えた。まず、和船から汽船へ転換し、寄港汽船が激増した。明治政府はすでに1873年に徴兵令をしいた。さしあたって、政府は、北海道だけ、徴兵制の適用を除外した。だがその後、1896年に、後志など4地方に徴兵令が施行された。1897年に、全道に徴兵令が施行された。日清戦争を体験したからである。政府は、日清戦争後の軍備拡張のため、営業税を新設した。日清戦争の賠償金で日本の資本主義は伸張した。

1897年、小樽築港第1期工事が起工された。

1899年、北海道旧土人保護法が公布された。小樽に区制が施行された。小樽港が国際貿易港に指定された。拓銀法が作られた。明治政府の北海道内陸部開拓計画は、アイヌ人の生活基盤のすべてを奪った（小川隆吉）。

1900年、拓銀が営業を開始した。市内電話が開通し、札幌にも通じた。1901年、第一回北海道会が開かれた。1902年、道はじめての総選挙が行われた。

鉄道も、明治24（1891）年、上野・青森間が、明治37（1904）年9月、函館・小樽間が完成された。

小樽経済の景気は、全道比5%を切る昭和10年（1935）代まで好調だった。

明治32（1899）年10月には人口は、函館、83285人、小樽65777人、札幌38874人であった。

翌1904年に日露戦争が行なわれた。緒戦の勝利で日本中で提灯行列が続いた。区民が軍に毛布千枚をさし出した。人々は好戦的となった。国債が応募させら

れ、物価はあがり、消費の緊縮政策がとられた。地租が重くなり、農民はいつそう勤勉に働かねばならなかった。

日露戦争（1904－05年）の頃、日本では重工業が伸びていた。三井は室蘭に日本製鋼所をこの1907年に設立した。日露両国代表の国境劃定会議が、小樽の日本郵船株式会社小樽支店で明治39年に行なわれた。この戦争によって日本は南樺太をロシアから割譲し、朝鮮の支配権をロシアから奪った。

日露戦争後に樺太（サハリン）の開発が始まった。1905年6月ポーツマス講話会議に先だって、日本は、あわよくば樺太全土を手に入れようと、樺太上陸作戦を開始した¹¹⁾。

1904年、函館本線がついた。日露戦争で、1904年に札幌・小樽間に軍用道路ができた。これが現在は国道五号である。

1910年に日本は、すでに支配していた朝鮮を併合した。

小樽商人に次の人々がいる。

船木忠郎は、小樽内村の年寄、大年寄をした。小樽と高島両郡の戸長を長く務めた。明治五（1872）年、信香の家に初めて郵便局を開いた。

渡辺兵四郎は、山田兵蔵に秋田から連れてこられた。明治13（1880）年、山田家総代理人になった。明治45（1912）年、5代目の小樽区長になった。

富山県の販売商・寿原外吉が、1881（明治14）年、小樽金曇町大火をきいて、有幌海岸に店を開いた。明治28（1895）年、身内で固めた共同経営を始めた。弟・重太郎は、東京高商1期生であった。

藤山要吉は、廻船問屋から海運業に進出し、小樽と稚内間の航路を作った。漁場をもち、樺太の日本海側の多くをもった。留萌線を開業した。藤山要吉は、小樽・北見間に通商路を開き、汽船で下関、神戸、ウラジオストック、ニコラエフスクなどに海運をはじめた。北樺太でニシンをとった。沖あげ機械を発明し、倉庫、鉄工業、農業をいとなんだ。公会堂、手宮の納骨堂を、市に寄付し

11) [琴坂守尚]『ガイドブック 小林多喜二と小樽』新日本出版 1994年 8ページ。

た。藤山要吉は、1911（明治44）年、皇太子（後の大正天皇）宿泊所として屋敷をたて、小樽区に寄付した。いまの市民会館の場所につくり、その後移転した。今の公会堂である。明治37（1904）年、旅順港閉鎖作戦で、板谷、藤山が儲けた。藤山は地主になり、農場を経営した。板谷もそうだ。

沼田喜三郎は小樽共成を作った。

石橋彦三郎は、滋賀県人であり、大阪の阿部幸の店で、四天王とまでなった。一八才で六万円をもって山形へ米を買いにきた。明治七年、小樽へ来て、兄の店を継ぎ、呉服業、海産問屋もやる。北海道の大豆、大麦に見込みを付け、醤油を作ろうとし、醤油王となった。

金子元三郎は、1891年、小樽で北門新報を発行し、第一代小樽区長になり、国会議員にもなる。

板谷宮吉（1857－）は、新潟生まれ、漁網商の4男で、金子元右衛門（元三郎の父）をたよって、福山へきた。その後、小樽へくる。荒物雑貨商店を開く。手広く商売した。精米、醤油、海運、倉庫業である持ち船が、日清・日露戦争で軍用船になり、膨大な補償金が入った。英国製大型船を6隻もった。そして南洋にでた。明治45（1912）年、板谷商船となった。大連に板谷商行、樺太銀行を作り、全国に土地をかった。日本10大大船主の1つに数えられた。

鉄道は、1874年に小樽・札幌が開通し、1892年に室蘭まで伸び、1898年に旭川まで通じ、1911年に北見まで達した。

1906年、鉄道国有法で、北炭の鉄道・函樽鉄道が買収された。

小樽が東洋一であるのは、築港機関庫である。ここでは30両が修理で、昭和初年にはこの機関庫に60両があった。（琴坂）

小樽で明治30（1897）5月、北防波堤工事が、手宮側から、道庁予算がついて始まった。明治41（1908）年に完成し、221万円使った。その後、築港側から南防波堤工事が始まる。

築港駅東側の若竹貯木場は面積21ヘクタール、道内最大の水面貯木場であった。

小林多喜二の伯父の店は、帝国陸軍御用達のパン屋で、軍隊相手に儲けた。

1895（明治28）年、小樽商工会議所が創立された。北海道は経済的には内地並になっていないとして、所得税が免除されていた。そのため、なかなかできなかった。

その議員が選挙された。初代会頭は山田吉兵衛だった。彼は、松前藩の城下町福山に生まれ、松村家の出である。小樽にきて、小樽の名家山田兵蔵の養子になった。若くして家督を相続した。市街から手宮への海岸道路を自費で建設した。

政府は、日清戦争後の軍備拡張のため、営業税を新設した。

小樽の新聞の歴史は、こうである。

山田吉兵衛は、札幌で週間『小樽新聞』を明治20（1887）年1月に出した。これは明治20（1887）年8月に『北海道毎日新聞』となり、日刊となった。

『北門新報』、『北海時事』があり、明治34（1901）年、3社合同した『北海タイムス』になった。これは『北海道新聞』の前身である。

小樽初の新聞は、金子元三郎の『北門新報』である。明治24（1891）年4月に作った。彼は中江兆民を主筆に迎え、憲政思想の普及に務めた。元三郎の父は、漁場の経営者で、明治17（1884）年に小樽に移った。子・元三郎は、鯨漁だけでなく、海運、鉱業、銀行、農場を経営した。園田道長官の女婿になった。また初代小樽区長になった。明治37（1904）年から衆議院議員であった。

札幌からきた『北海民灯』が明治27（1894）年11月に『小樽新聞』になった。

金子元三郎が『北門新報』を明治25（1892）年5月に札幌に移転した。その後、『北辰日報』『新北門』が出るが、廃刊となった。明治27（1894）年に『小樽新聞』が上田重良によって作られた。上田重良は、東京専門学校出である。明治26（1893）年5月に札幌で『北海民燈』が出たが、それを上田が買い、『小樽新聞』としたものである。なお、明治27年に『小樽商業新報』が出た。明治35（1902）年から36（1903）年には、小樽では続々新聞が出た。『小樽日報』——つまり石川啄木が勤めた新聞である——、『小樽公論』『北海朝報』『北政日報』『北海道新聞』『北民』『小樽毎日新聞』である。しかし、これらは倒れた。例えば、『小樽日報』は半年で廃刊した。一方、『北海道毎日新聞』『北門新報』『北

海時事』が合同して、札幌に『北海タイムス』が作られた。これと、『函館毎日新聞』、『小樽新聞』が道三大新聞となった。民政党系の『小樽新聞』に対抗して、政友会系の『北門日報』が小樽で作られたこともある。

東京からの郵便は汽車・汽船による1日1便だった。小樽郵便電信局の電信扱い数は多かった。全国700局のうち、第6位で、発信は7位、電信料は11位であった。

小樽商業会議所は、火事で引越しをし、明治40(1907)年に改築された。現・水道局の場所に移った。ここへ石川啄木が、10月9日、新築落成式に、小樽新聞の代表として出席した。

小樽は「仕込み制」だった。それは、漁場の親方が商人から事業前に資材一切の融通をうけ、代わりに産物はすべて一括委託販売して、製品の売却後、生産した。

1904年、日露戦争が起こされた。朝鮮・満州をめぐるロシアと日本の戦争であり、これは帝国主義戦争であった。1904年2月8日、仁川沖、旅順港を、日本が奇襲して、始まった。北海道からは第7師団が出征した。この年、北海道鉄道函館・小樽間全線が開通した。1905年に函館本線が全通した。

1905年に日露戦争が終った。この間ロシアでは、第1次ブルジョア革命が行なわれた。「血の日曜日」事件が革命の発端であり、ロシア全国にソヴィエトが作られた。これは鎮圧されたが、そのため、ロシアでは戦争どころではなくなった。こうして日露は休戦した。休戦条約はポーツマスで調印された。日本に南サハリンが割譲されることになった。日露両国代表の国境劃定会議が、小樽の日本郵船株式会社小樽支店で、明治39(1906)年に行なわれた。この建物は、明治39(1906)年に建造された、英国風ルネッサンス様式である¹²⁾。日露戦争の結果、日本は樺太を領有し、小樽の商圈が拡大していった。道内・樺太の生産物は、船・車 [= 荷車] により、小樽港に集積され、ここから本州・外国へ積み出され、また道内・樺太での消費品・化学原料が、本州・外国から

12) 日本郵船は、この建物を市に売却(1955年)し、1956年、市立博物館となった。

入ってきた。これら取引の大部分は小樽商人の手で行なわれた。樺太への移入品の半分、樺太からの移出品の3分の1は小樽港を通った。こうして、三井物産と、神戸の曲辰（かねたつ）鈴木商店は、小樽に出張所を置いたほどである。明治32（1899）年には小樽は開港場に昇格した。

「明治25年（1892年）、北海道長官になった北垣国道も、西海岸道央部に位置する小樽港の将来性を認め、[明治]26年（1893年）夏、内相井上馨の来樽と相まって、築港工事の基礎調査をした。その結果、良好な見通しを得たので、29年（1895）の国会に十ヶ年継続事業費21万8千余円が協賛され、（明治）30年（1897）4月から第一防波堤工事に着手した。」¹³⁾。小樽は天然の良港と言われるが、実際は湾形が広すぎるために、強風に見舞われると、船舶を転覆・大破されることがあった。これを防波堤によって阻止できるようになるのであった。

小樽では、第一期に引き続いて、第二期の港湾防波堤の工事が行われた。1908（明治41）年に北防波堤が完成し、1921（大正10）年に南防波堤が完成した。小樽港の第二期築港工事、つまり南防波堤工事が始まった。先ず、2万6千坪の埋め立て工事が若竹町の海岸一帯にわたって着手された。土建業者が前面の山を切り崩し爆破し、ところどころに棒頭がつく監獄部屋式の土工部屋が立ち、ここに多数の土工が流れ込んだ。埋め立てが進むにつれて、若竹町も急速に変わってきた。道路が開かれ、宅地がひろがり、商人も流れ込み、水産学校が建ち、築港駅も竣工した¹⁴⁾。

1907年、樺太庁が設立された。

1908年、青函連絡船が開始した。北海道国有未開地処分法が改正された。

小樽の銀行の歴史を記しておこう。

第四十四銀行が明治11（1878）年8月で、小樽で1番早い。明治12（1879）年、第四十四国立銀行は、小樽に支店をおいた。同行は、明治15（1882）年に第三国立銀行に合併した。第六十七国立銀行が、小樽支店を設置した。

13) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年 19ページ。

14) 手塚英孝『小林多喜二』新日本出版社、上。

小樽では、明治12(1879)年に、三井銀行、第四十四銀行、第六十七銀行が支店をおいたという説がある。だが三井銀行の小樽出張所は、明治13(1880)年4月開設である。第三国立銀行は、明治16(1883)年に函館山田銀行に営業を譲渡した。明治16(1883)年2月、函館山田銀行の支店が開設された。だが1, 2年で引き揚げられた。

明治17(1884)年に第三十三銀行が出張所を開き、明治23(1890)年に引き上げた。

明治22(1889)年 田中銀行が、小樽支店を設置した。

明治26(1893)年 日本銀行が、小樽派出所を設置した。

明治28(1895)年 小樽貯蓄銀行が設立された。

明治29(1896)年 日本商業銀行小樽支店が設置された。

明治30(1897)年 余市銀行が、本店を小樽に移し、小樽銀行と改称した。

明治32(1899)年 北海道拓殖銀行が設立許可された。小樽区制が実施された。第十二銀行小樽支店が設置された。

明治33(1900)年、北海道拓殖銀行が営業を開始した。

北海道の拓殖事業をすすめるために、政府と民間が協力して、北海道拓殖銀行法が可決された。設立委員は、政府関係者、東京を中心とした実業家、道内の実業家、地主、からなっていた。低利資金の金融機関として、1900年に北海道拓殖銀行(以下、拓銀と略す)が創立されたのだった。拓銀は、北海道と樺太の半植民地的開発のために設立された半官半民の特殊銀行であった。初め、資本金が300万円で、株式総数6万株、うち、2万株は政府が買い、皇室もすこし払い込んだ。申し込みは15倍にもなった。

明治34(1901)年 拓銀小樽支店が設置された。中立(なかだて)銀行(本店 小樽)が設立された。

明治39(1906)年 小樽銀行が、北海道商業銀行を合併し、北海道銀行と改

称された。

明治40（1907）年 第四十七銀行小樽支店が設置された。稲敷商業銀行（本店 茨城県）が、8月、本店を小樽に移す。9月に、本店を札幌へ移し、泰北銀行と改称した。

明治45（1912）年 中越銀行小樽支店が設置された。

大正3（1914）年 不動貯蓄銀行が、小樽に出張所を設置した。泰北銀行が、本店を札幌から小樽へ移転した。

大正6（1917）年 農産物（えんどう・はっか・でんぷん、など）価格が暴騰した。

大正8（1919）年 中立銀行が、小樽銀行と改称した。

大正11（1922）年 小樽市制が施行された。三菱銀行小樽支店が設置された。

昭和3（1928）年 （旧）北海道銀行が、百十三銀行を合併した。

昭和4（1929）年 小樽銀行が、北海道商工銀行と改称した。

明治20（1887）年に第二十銀行、明治22（1889）年に北海銀行、明治23（1898）年に田中銀行が、支店を開いた。だが三井、田中、二十、北海しか永続しなかった。第二十銀行は、大正元（1912）年に第一銀行に吸収合併された。北海銀行は大正2（1915）年、第一銀行に営業を譲渡するまで続いた。田中銀行は大正7（1918）年に閉鎖した。その後、明治26（1893）年に第百十三銀行の支店が開かれた。明治30（1897）年に国立から株式会社になり、昭和3（1928）年、北海道銀行に合併された。明治26（1893）年、日本銀行の派出所が開かれた。日銀は、明治27（1894）年には出張所となり、明治39（1906）年に支店となった。明治28（1895）年に、小樽貯蓄銀行ができた。それは明治34（1901）年に閉店した。明治29（1893）年に日本商業銀行の支店が置かれた。日本商業銀行は安田系であり、大正12（1923）年に安田銀行となった。その後の富士銀行である。

屯田銀行も、明治27（1894）年に小樽支店を置いた。明治31（1893）年には本店を小樽に移した。明治33（1900）年に北海道商業銀行と改称した。明治27（1894）年、余市に余市銀行ができ、明治28年に、小樽支店を置き、明治30（1897）

年に、小樽に移り、小樽銀行と改称した。そして、元・屯田銀行を改称した北海道商業銀行を明治37（1904）年に合併し、北海道銀行となった。これは戦前の北海道銀行であり、昭和19（1944）年に拓銀へ吸収合併された。だから現在の北海道銀行とは違う。

十二銀行が支店を明治32（1899）年に出した。本店は富山である。後、北陸銀行に合併された。第四十七銀行が、明治40（1906）年に小樽支店を開いたが、十二銀行に合併された。中立銀行が、明治34（1901）年に本店を小樽にして設立された。大正8（1919）年に小樽銀行と改称し、昭和5年、寿都銀行と合併し、北海道商工銀行と改称し、その後、道銀に合併した。

泰北銀行が明治33（1900）年に札幌で設立された。大正3（1914）年に小樽に本店が移された（色内2の2、後に稲穂東7の11）。北海道殖産銀行小樽支店もあった。大正8（1919）年にできた銀行であった。大正3（1914）年、樺太銀行は小樽支店をもったが、昭和16（1941）年に拓銀が合併した。昭和16（1941）年、泰北、北海道殖産、北海道商工銀行は、道銀に吸収合併された。

北海道拓殖銀行は、明治33（1900）年に発足され、小樽支店は34（1901）年に設置された。

明治38（1905）年、北海道貯蓄銀行ができ、翌39年に小樽支店が開設された。明治41年に休業となった。だが明治42年に再開され、拓殖貯金銀行と改称した。その後大正11年に、北門銀行となった。それは後に拓殖銀行に合併された。

明治40（1907）年に、函館銀行小樽支店が設けられ、大正11（1922）年に函館百十三銀行に合併された。中越銀行が、大正元年に支店を出したが、後に、合併して北陸銀行になった。大正6（1917）年に不動貯金銀行支店ができ、後に、協和銀行となった。大正11（1922）年には三菱銀行支店が開設された。大正4（1915）年に第七銀行小樽出張所があった。第一銀行が大正元年に、二十銀行を合併した時、小樽に来た。大正の初め、不動貯金銀行が代理店を置いていた。大正6（1917）年に支店を置いた。横浜正金銀行が小樽出張所を大正11（1922）年に開設した。それが大正15（1916）年に支店になった。（越崎）

明治28（1895）年に三菱銀行が建てられた。小樽無尽会社は、後に北洋銀行

になる。

函館に小樽が追い付き追い越したのは、日銀の設置と小樽高商の開学であった。明治45（1912）年に日銀の建物が完成した。日銀は明治26年に、札幌、函館、根室、室蘭に4出張所、小樽に派出所を設けた。明治30（1897）年に小樽は出張所に昇格した。明治40（1907）年に支店になり、道経済の中心が函館から小樽に移った。

国立銀行は実際は民間銀行であった。明治31（1898）年までにすべての国立銀行が普通銀行になった。小口高利がはやった。銀行金利は小樽で最低2割だった。日清戦争の賠償金で日銀から銀行が金を借り、商人に貸し、利ざやをかせいだ。

小樽無尽会社は寿原重太郎が作った。後に北洋相互になり、その後、北洋銀行になった。明治27（1894）年に余市銀行ができ、明治30（1897）年に本店を小樽に移して、小樽銀行とした。明治39（1906）年に北海道商業銀行と合併して、北海道銀行になった。戦時中これは拓銀に合併された。

小樽は明治20年代に、商港としての地位を確立してきた。

小樽は、玉葱、林檎、の農産物輸出に力を入れ、全国3位の輸出港になった。20に及ぶ銀行が小樽に集まった。建築は木骨石造建築であった。木骨（もっこつ）とは、建物のホネの部分の木でできているものである。当時の小樽はほとんどこれであった。

明治32（1898）年、小樽は、函館について、第2の開港場になった。

鉄道と港湾整備のおかげで急速に発展した小樽では、やがて官と結んだ商人たちが羽振りをきかせ、道内一の経済都市として繁栄するようになった。大金持が続出し、明治後期には、上京すると吉原を借りきって豪遊し、東京の新聞に「蝦夷の大尽、吉原の大門を閉づる」とまで宣伝された回船問屋が現れ……た¹⁵⁾。

15) 夏堀正元「彼を育てた町——小樽」(小林多喜二全集月報3, 第3巻付, 1982年9月) 1-2ページ。

小樽商圏は、積丹から斜里までであり、北海道では函館と二分していた。海運ルートによって全道を掌握していた函館商圏に対して、上川線・釧路線の鉄道を通じて、小樽商人が道央・道東に進出するようになった¹⁶⁾。これらの路線を作るために、初め囚人労働が使われた。小樽は、その後樺太貿易を独占的に支配した。それは函館をしのいだ。小樽の景気がよくなったのは、日露戦争以後であり、日露戦争による南カラフト占領で、小樽は儲けの基地になった。さらに最高によくなったのは、第一次大戦の時である。

港町小樽は軍港としても役立った。日清戦争の時には4千人の兵隊が小樽から大陸に渡ったほどだった。日露戦争時からは樺太へ軍隊が行った。

小樽が北海道で一番であるのは、倉庫街・問屋街である。問屋は、樺太貿易で儲けた。次に、金融センターである。仏壇屋、繊維問屋も一番であり、仏壇業は山田町(まち)でさかんであった。山田町は、山田吉兵衛(福山出身。慶応年間に小樽に来て、漁業・呉服・荒物商、その後、漁業・地主・区長になる。明治42年1907没)が地主であったので、それに由来する¹⁷⁾。繊維問屋は南樽(南小樽)にあった。市内に11の駅があった。

小樽が日本一であるのは、水路つまり運河の長さであり、それは長さ1320m×幅40mあった。そして下駄屋である。村林みのすけ(巳之吉)が大きな下駄屋であった。かれらは、天塩水系の木材を使って、それを乱伐した。だがその後、それもやめて、カラフトの木材を乱伐した。なお現在も乱伐されたままであると言う。

ついで小樽は、機関庫として最古のものを持った。手宮第三機関庫である。これは明治17(1884)年に起工され、翌18(1885)年に出来上がった。現在の鉄道博物館である¹⁸⁾。

16) 榎本守恵『北海道の歴史』北海道新聞社 297ページ。

17) 井上巽「戦前期における小樽の経済的發展」(『北海道経済』1978年9月) 3ページ。

18) 小樽のこの機関庫に、昭和3年(1928年)に、下山定則がいた。戦後の下山事件で有名な、国鉄総裁である。

小樽の政党は政友会と民政会であったが、小樽議会では、運河、高商問題で、争いがあった。高額納税者は議員になれて、小樽にはたくさんいた。有名な者は金子元三郎である。彼は、新潟から、そして福山からの出身で、明治初年に來樽し、漁業・海陸物産問屋を経営した。その後、区長になった。金子合資会社をつくり、地主になり、貴族院議員となったのである。板谷宮吉もいた。彼は、新潟出身で、明治16(1883)年に來樽した。板谷合名(海陸物産・精米・倉庫)を経営し、その後、板谷商船・樺太銀行・農場を経営した。彼も議員になった。

ただし北海道の帝国議会への参政権は、1900年に決まり、1902年の総選挙が初めてであり、それも札幌・函館・小樽の3区から各1名の衆議院議員を選出するというものであった。それに北海道会議員選挙も1901年の実施であり、だからそれまで北海道は植民地だったのである。

明治32(1899)年、小樽区制が実施された。

鯨漁の代表的網元は、青山、白鳥、茨城であった。

鯨がだんだんとれなくなった。それが小樽までやってきた。そこでタブーが作られた。女人禁制である。そして漁民が住まないように、二八小屋が作られた。鯨は北海道の主産業の一つであった。小樽では昭和初年には、鯨は駄目になった。鯨がとれなくなったのが、小樽の没落の1つの原因であった。次いで現代の小樽が経済的に没落した原因は、南樺太の喪失である。日露戦争後に領有した南樺太は、第2次大戦の敗北でソ連に返還された。これは小樽経済にとっては致命的であった。他の原因は、道庁の所在地として札幌の発展である。

明治20年代、30年代、小樽付近では鯨漁が盛んであった。それでも年によっては、好・不漁を繰り返していた。第二次大戦中でも少し鯨は来たが、昭和21(1946年)に本当にとれなくなった(琴坂)。昭和20年代に少しとれた。30(1955年)以後、鯨は小樽の浜から完全に姿を消した¹⁹⁾。さしあたり、今田光夫『ニシン文化史』(共同文化社 1986年)257ページの表をもとに、私を掲げる。

19) 『おたる再発見』北海道新聞社 18ページ。

北後志（小樽も北後志である） 春鯨漁獲量
（単位百トン）

西暦・年		西暦・年		西暦・年	
1910	1020	1927	855	1944	390
1911	532	1928	278	1945	465
1912	698	1929	660	1946	405
1913	1463	1930	—	1947	308
1914	1845	1931	1043	1948	15
1915	968	1932	630	1949	—
1916	1343	1933	1485	1950	83
1917	630	1934	788	1951	173
1918	1163	1935	—	1952	30
1919	1838	1936	—	1953	—
1920	2115	1937	83	1954	173
1921	1155	1938	—	1955	—
1922	983	1939	—	1956	8
1923	1695	1940	83	1957	8
1924	1485	1941	—	1958	—
1925	1793	1942	98	1959	—
1926	1290	1943	8		

石炭は日本資本主義にとって重要なエネルギーであった。北海道では北海道炭鉱鉄道会社（略して北炭）が、夕張、幌内、幾春別の炭鉱を経営していた。幌内炭鉱は官営幌内炭鉱の払い下げをうけたものである。幌内では囚人を使役し、飯場制度を採用していた。飯場制度は土木・建築ではタコ部屋・監獄部屋と言われる。この幌内から鉄道が小樽に来ていた。だが明治39（1906）年の鉄道国有法で、国内の鉄道はみな国有となった。こうして北炭社線も函樽線も国有となった。

明治時代には、内地（北海道人が本州のことを、こう表現する）から、米・塩、鉄道資材などを積んだ船が、小樽に入って来た。小樽からは、石炭、鯨かす、木材、雑穀が出て行った（奥田二郎）。小樽は内地資本に食われた。内地米を道内に売る会社も現れた²⁰⁾。

小樽は金属加工もさかんだった。これは炭鉱に機械を売るためだった。

小樽は外国の感じがした。港町で、外国船が入ったからである。それに銀行がたくさんあった。日本銀行、三井銀行、三菱銀行、安田銀行などである。ただし、三菱、安田は、その後、小樽を撤退した。日本銀行は、明治39（1906）年に置かれた。現在の建物は、明治45（1912）年に竣工した。辰野金吾の設計の、洋風石造建築であり、煉瓦づくりで、モルタルである。三井銀行は、明治13（1880）年に置かれた。現在の建物は、明治38年に改築されたもので、ルネッサンス様式、鉄筋コンクリート造りである。

1907年6月に、小樽の沖仲士・陸仲士の争議が起きた。そしてその労働条件改善のために、奔走した人がいた。大塩慶次郎である。小樽豊職人組織「親和会」の中心人物で、豊職人の賃上げ争議を指導したのだが、この争議に加わった。新谷辰次郎（1856-、石川出身）は、小樽沖仲士の相談役をつとめ、仲士の労働条件改善のため奔走した。晩年に市議になった。菅谷孫吉は、その小樽沖仲士の相談役をつとめた。藤田鉄之助と中山常次郎は、陸仲士の労働条件改善のために奔走した。

また1910年3月、三田岩吉は、小樽はしけ業中塚組大頭として、経営者の不正を追及した。

1911年6月16日、小樽の高島村で漁民ストラキが計画された。そして次の人が検挙された。まず、伊藤栄次郎（1887-）、そして、以下の人たちは20日に検挙された。高橋太郎（1890-）、本間喜一（1887-）、本間金次（1891-）、本間鶴吉（1891-）、本間虎松（1893-）である²¹⁾。

20) この会社は、投機→雑穀→倉庫業→代用血漿と変わった。共成となり、フジヤ家具となり、現在、オルゴール堂である。

21) 堅田精司「北海道社会運動家名簿」1973年。

小樽中央駅は、現在の JR 小樽駅の前身である。いわゆる小樽駅は明治36（1903）年に開設された。正式駅名は小樽中央駅である。明治39（1906）年に北海道炭鉱鉄道株式会社から国営になった。その初代の駅長が、啄木の姉の夫・山本千三郎であった。その後、高島駅、稲穂駅、中央小樽駅となり、大正9（1920）年に小樽駅となった。現在の建物は、昭和9（1934）年に作られ、当時、地下道つきの超近代的鉄筋コンクリート建築と言われた。

林有造（1842-1921）も小樽にいた。自由党幹部で、岩村道庁長官の弟である。色内町手宮町の海岸の埋め立てをした。時の政府から激しい圧迫をうけ、北海道に難をのがれていた。明治の自由民権運動で獄につながった。名著『旧夢談』（明治24年）を書いた。

内村鑑三は、明治14（1881）年、札幌農学校を卒業し、開拓使御用掛となり、あわび養殖のため試験所を高島郡祝津に定めた。明治15（1882）年9月4日から28日まで、滞在した。塩谷には坂西志保がいたし、岡田嘉子の父も「北門日報」の主筆として呼ばれた。

明治40（1907）年、函館の大火がきっかけで、多くの人が函館から小樽へきた。

石川啄木（本名、一。はじめ。1886-1912）は、短い間だが小樽で生活したことがある。

啄木が勤めた『小樽日報』は、山県勇三郎が出資者で、白石義郎が社長だった。ここには野口雨情（1882-1945）もいた。『小樽日報』で、啄木の月給は、初め20円であった。石川啄木の小樽論を、啄木の日記から見よう。明治40年（1907）年、小樽にやってきた啄木は、9月14日の日誌で書く。

小樽から「再び車中の人となりて北進せり、銭函にいたる間の海岸いと興多し」。これは現在でも言えることである。9月27日に、逆に札幌からの汽車——明治22（1889）年まで開拓使が直接経営をした。その後、北炭に払い下げとなる——で帰る時、彼はこう書く。「銭函をすぎて千丈の崖下を走る」。10月1日。「遠く聞ゆる夜回りの金棒の響は函館のそれよりも忙しげ也。小樽は忙しき市なり。札幌を都といへる予は小樽を呼ぶに『市』を以てするの尤も妥当なるを

覚ふ。」²²⁾10月3日。「小樽の如き悪道路は、蓋し天下の珍なり。」²³⁾当時は道路が舗装されていなかった。そして小樽の悪路は有名だった。

彼は、「小樽のかたみ」というスクラップを作っていた。そこにはこうある。当時小樽は、人口10万で、その膨張が急速であった。商港としては、函館を凌駕して〔北海道で〕第1位に上がった。日露の協約が成立してからは、ウラジオストックとの貿易で、覇を敦賀と争っている。新聞も上田重吉——重良であろう——の小樽新聞は三千幾百号となり、約一万部を越えている、と。啄木は云う。「小樽にきて初めて真に新開地的な、真に植民地精神の溢れる男らしい活動を見た。小樽の人は歩くのでない、突貫するのである。小樽人の特色は、執着心のないことである。」

明治24(1871)年に小樽と高島が合併した。日清戦争以後、政府は北海道拓殖に力を入れた。明治32(1899)年10月、自治体小樽が誕生した。つまり行政区画として、小樽区ができたのである。初代区長は金子元三郎で、明治35(1902)年まで勤め、第2代区長は山田吉兵衛、第3代区長は椿である²⁴⁾。施行の時、色内村、稲穂村、手宮村、などを合わせて小樽区とした。

人口は6万人となった。大正5(1916)年に10万人を越えた。大正11(1922)年には、小樽市となり、人口が12万人近くなり、同年、札幌が市となり、13万人であった。

小樽は初め、現在の南小樽が中心地であった。明治初年以来、勝納川を中心に発展してきた。現在の小樽市心に妙見川(みょうけんがわ)が流れているが、明治32(1899)年の小樽区制施行以前は、そこを境にして小樽と高島が別れていた。妙見川の上流をオコバチ川と言う。

明治14(1881)5月21日夜、金曇町(こんたん町、今の若松町)で出火し、旧小樽はほとんど全滅し、その後、中心が今の花園、稲穂、色内へ移った。その後、2つの火災が起きて、第一火防線=浅草通り、第二火防線=停車場通り、

22) 『石川啄木全集』第5巻 筑摩書房 1983年。

23) 同、170ページ。

24) 倉内孝治編『小町谷純先生の 小樽の思い出』。

第三火防線＝竜宮通りが作られた。旧小樽市内は、急激に無秩序に膨張し、山坂が多かったため、道幅がせまく屈曲が多く、また柵葺・板壁の家が大多数であった。春先から夏至にかけて西北西か西南西の季節風は、10m以上の風速で吹き荒れることが多く、全国都市中最も出火率の高い都市とされていた。

明治37（1904）年5月8日夜、折からの西南烈風にあおられて、稲穂町畑14番地（現産業会館付近）の失火が、稲穂町一帯と色内から石山を越えて手宮の一部にいたる2500戸を焼いた。小樽最大の火事である（松田惇二）。ちなみに多喜二の伯父の履災した火事である。

小樽の大火は、明治37（1904）年5月8日の夜のそれが最大であった。

明治	西暦 年	焼失戸数	明治	西暦 年	焼失戸数
20	1887	402	37	1904	2481
25	1892	146	39	1906	247
27	1894	700	40	1907	113
29	1896	786	42	1909	700
35	1902	750	44	1911	1251

1910（明治43）年は、幸徳秋水たちの大逆事件が起きたことで特筆される。もちろん幸徳は、この天皇暗殺事件に加わっておらず、デッチ上げ事件であった。翌年、幸徳らは絞首刑となった。そして小樽では幸徳秋水を悼む会が行なわれた。この事件によって日本の社会運動では「冬の時代」が始まった。この年1910年に日本は、すでに支配していた朝鮮を併合した。

全国的には1872年に義務教育制が実施された。

小樽は1899（明治32）年にすでに区制が施行されていた。北海道ではこのころ約98%の児童が就学している²⁵⁾。そして女子教員の比率は31%であった²⁶⁾。

25) 榎本守恵『新北海道史』北海道新聞社 1983年。

26) 『北の女性史』北海道新聞社 1986年。

小樽区内の区立小学校は、明治40（1907）年に、10校で、尋常小学校が1、尋常小、高等小の併置が、9であった。学級数は尋常科が77、高等科が44、計121学級である。明治40（1907）年の1学期末に、児童数はこうだった。

	男	女	計
尋常科	2910	2543	5453
高等科	1544	1059	2603
総計	4454	3602	8056(人)

翌明治41（1908）年に、義務教育が6か年となり、2学年制の高等科が廃止された。6年制である。小樽では、稲穂、稲穂女子、量徳、量徳女子、花園の5校だけは、小学校の上に2年の高等科を作り、他の5校は単に尋常小学校とされた²⁷⁾。

明治41年の改革によって、いままで4年で卒業していた児童は、6年通うこととなり、2年の高等科の学年が義務となり、尋常5、6年生となった。こうして全国でも小学生が増大した。少なくとも、旧高等科に行かない人が行くようになったからである。小樽では旧高等科に行っていた人は比較的多かった。

小樽の公立の小学校は、次である。

量徳小学校 潮見台小学校 稲穂小学校 奥沢小学校 量徳女子小学校 稲穂女子小学校 手宮小学校 色内小学校 堺小学校 花園小学校 手宮西小学校。

なお市内には、3年制の簡易科小学校が、これ以前にあった。小学校は、男女別のクラスであった。

小樽の女学校は、その北海道庁立小樽高等女学校と、私立では、実践高等女学校（現在の双葉女子高校の前身）と、緑ヶ丘高等女学校、各種学校として²⁸⁾、

27) 『小樽日報』（1907）明治四十年十月十五日、第一号。『啄木全集』第8巻による。

28) 『北海道庁第9回統計書』（明治31年発行）。

静修女学校などがあった。その後、市立高女もできる。

小樽商科大学の前身である小樽高等商業学校が、明治43（1910）年に認可され、翌44（1911）年に開校された。

明治政府は、富国強兵政策をとった。その富国のための一手段が文教政策であり、政府はまず、帝国大学を作った。そして高等学校（旧制）や高等商業学校を作ることになった。帝国大学は、官僚を作り、法律を教える必要があった。その基礎として高等学校を作ったのである。しかし北海道には高等学校は作らなかつた。その代わり、明治9（1876）年に札幌農業学校を作った。これは、明治40（1907）年に東北帝国大学農科大学になり、その後、北海道帝国大学になってゆくのであつた。そして予科もできた。一方、政府は、富国のために国民に高度な商業を学んでもらう必要があつた。そのため、高等商業学校が作られねばならなかつた。高等商業という学校は、日本の資本主義経済の発展のための必要から全国的に設立された施設である。資本主義体制下の企業の経営上必要な事務的技術を身につけた者を養成するためのものであつた。

東京に高等商業学校が作られ、明治35（1902）年に、その高等商業学校が東京高等商業学校と改称された。同年、神戸高等商業学校が設立され、明治37（1904）年に、大阪市立高等商業学校が高商に昇格し、明治38（1905）年には、山口高等商業学校および長崎高等商業学校が設立された。大阪のそれは国立ではないので、次に設立される国立の高等商業学校は、第五高等商業学校とされた。日露戦争（1904-05）後、政府は、国際貿易振興上、高商をさらにもう一校新設する構想を持った。これを察知して、全国の有効都市が誘致運動を激しく始めた。それに、これら既存の4つの国立高商は東京より西にあつたので、東京より東に作ることにされた。

日本経済の発達に伴い、明治以来、小樽も発展していた。小樽区会は、政府へ高等商業学校を設置したいという希望を述べた。こうして小樽高等商業学校が創立され、北海道では、札幌農業学校に次ぐ古い高等教育機関となつた。小樽高商は、北海道でただひとつの文科系官立専門学校であつた。地元の北海道出身者が三分の一くらいで、あとは全国各地からの学生で占められた。

小樽区では、高商の敷地として1万坪、建設費のうち5万円を寄付すると区議会で決定し、椿区長と金子元三郎代議士により政府への働きかけがなされた。金子代議士を上京させて、猛運動を開始した。金子は、「小樽に高商を持って来るならば、学校の敷地はもとより、先生の官舎、学生の寄宿舎等を、全部地元で寄付する……」と政府に申し出た、と言う^{28a)}。政府は、地元が建設費37万円のうち20万円を負担するならば、小樽に高商を設置してもよいと返事をした。その後、区会で可決された。敷地は8カ所候補があって、それぞれの地主が寄付の申し出をした。文部省係官が派遣され、敷地（当時は稲穂町、現在の緑町）が決定した。この土地は、木村円吉・金子元三郎・河原直孝・青木乙松・白鳥永作各氏の土地1万2千坪であった。

こうして明治40（1907）年に、第五高等商業学校が小樽に設置されることが決定した。初めは第五高等商業学校とされ、小樽高商とは言われなかった。当時小樽区の年間予算は、約30万円であり、20万円の負担は重すぎるので、北海道庁が5万円を集め、残りの15万円を小樽の資産家から寄付を募ろうとした。各町内に割り当てたが実現せず、結局、区債（借金のこと）を発行して消化することになった。明治41（1908）年5月に、敷地（の整地）をし始め、校舎建築が始まり、同43（1910）年2月に竣工し、同年3月、小樽高等商業学校の設置が公布された。翌44（1911）年4月から授業が開始されることが公示された。もっとも、後述するように、開始は5月であった。

この高商は、3年制で、1年が3学期に別れ、目的は「実業学校令及び専門学校令に依り商業上必要なる高等の教育を施す」ことであった。高商の学科内容は、他の高商でもそうであったが、東京高商を模範として定められ、実用英語、商業実践に重点が置かれた。入学者は、満17才以上の男子で、中学校や甲種商業学校を卒業した者、などである。学校職員の定員は、校長1人、教授2人、助教授2人、書記2人とされ、開校時は、教授6名、助教授3名、書記3名となり、その後徐々に定員は増大するのであった。

28a) 倉内編書。

初代校長は、渡辺龍聖であり、明治44（1911）年にその校長となり、11年半勤め、大正10（1921）年11月に退任した。小樽高商は、この渡辺によって創られた。それは、単に彼が初代校長であったばかりではない。実質的に彼がこの学校に息を吹き込んだのであった。

小樽高商では創立当時から、商品実験の教室があった。フランクは、石鹼工場設立の原動力になった。後に魚油脱臭法の特許を出している。魚油を石鹼材料にしたのであり、小樽では魚油が多かった。鯨漁のお蔭である²⁹⁾。大正の中ごろには、石鹼工場を造った。これは商品学の実験工場で、そこで出来た商品は、「高商石鹼」といって、休暇中に学生が全道に売りに回った。そして学費の足しにする学生もいた。香りと品質が良かったので、当時はよく売れた。洗濯石鹼であった。小樽の人たちがそこへ買いにきた。工場は今の高尚湯（緑第二大通）の左を上がった左側にあつて、教授や学生が実習で作った（越崎）。高商石鹼は、高商生が、お祭りの時期にも売った。評判がよかった。よく落ちるといふものだった。高商卒業者は、英語、とくにコレボン（商業英語）に堪能であるという評判が高かった。

次の順番として北海道庁立小樽商業学校が設立されることになった。これは大正2（1913）年に開校した。

小樽の中等学校には戦前には、小樽中学と小樽商業（庁立）以外に、庁立小樽水産学校がある。これらは公立＝北海道庁立である。そして私立小樽商業（後に改名して私立北海商業学校、現在の北照高校の前身、明治28年創立）があった。小樽市立長橋中学もできる。以上は男子校である。

庁立小樽水産学校は、明治37（1904）年12月に文部省から開校認可され、明治38（1905）年4月1日に庁立水産学校として創立された。現在の北海道小樽水産高校の前身である。『北海道庁第9回統計書』によると、別に水産学校がある。それは明治27（1894）年創立で、私立とあり、3年制だった。各種学校に入れられている。この学校は数年で廃校になった。したがって庁立水産学校

29) 鎌倉の稿、『緑丘』新68号)。

との関連はない。なお北海道庁立の商業学校は、函館と小樽にあり、私立では前述の小樽商業と、根室に乙種の商業学校があった。こうして庁商は全道から受験生を集めるほどの難関校であり、また小樽が当時いかに商業学校あるいは教育の中心地でもあったかが、うかがわれる。

明治28（1895）年から30（1897）年まで、商業学校という名の学校が他の場所にあった。また小樽商業は、明治34（1901）年に私立小樽商業学校（乙種）として創立（設立改組？）された。花園町16番地にあった。明治40（1907）年に緑町に移った。庁商開校を機会に、私立北海商業学校と改めた。ここでいう庁立水産学校は、明治38年（1905）年4月に札幌に創設された。明治40（1907）年2月に小樽若竹町に移って庁立小樽水産学校となった。北海道では、甲種実業学校としては、明治16（1883）年の函館商船学校、明治19（1886）年創立の函館商業学校について、第3番目である。

藤村信吉は、道庁から欧米に派遣され新知識を吸収して、帰国し、鮭鱒孵化事業として有名な千歳孵化場の創立者として、北海道水産業の大功労者であった。

明治43（1900）年8月8日に、北海道汽車博覧会が小樽に来た。道内を巡回したのだった。大正元（1912）年12月、小樽の街にはじめてガス燈がともった。

鉄道院は、明治44（1911）年に、石炭積み出し施設として手宮海岸に、幅21m、長さ287mの高架栈橋をたてた。小樽の特徴の一つは、手宮にあり、石炭を運ぶ線路が栈橋となって海上へ300m出ていることであった。その高さは18mあった。そして日夜、石炭の音が小樽中に聞こえていた。ここで石炭が船に積みまれていた。

スキーが小樽に入ったのは、高商講師苫米地が明治45（1912）年2月に、またオーストリアのレルヒ中佐に教わった三瓶中尉が明治45（1912）年4月、小樽でスキーを実演したのが最初である。

小 括

小樽は、カラフト領有と鯨漁で栄えた。それゆえ。これらを喪失すると没落する。明治時代にこの2つが得られ、大正時代に小樽は繁栄する。これは第二次世界戦争での敗北まで続く。

文 献

- 井上 巽「戦前期における小樽の経済的發展」(『北海道経済』78, 9月号)
湯沢誠「北海道における地場資本の展開について」(農総研北海道支所『研究季報』
No. 7。)
『維新変革と近代日本』吉川弘文館
高倉新一郎『アイヌ政策史』
琴坂守尚「小樽の労働者の伝統」(『北海道経済』1978年9月)
倉田 稔『小林多喜二伝』論創社